

# かわかみ通信

皆さんお暑うございます。如何お過ごしでしょうか。熱中症予防に水分を沢山とってくださいね。

さて、皆さんは毎年7月22日に行われている総参祭(その+まいり)というお祭をご存知でしょうか？

一般的な理解では、氣比神宮の仲哀天皇の御霊が常宮神社の神功皇后の御霊に逢いに行くという七夕さんのようなイメージではないでしょうか。

常宮神社の由緒書には「昔より一体両部の神社に見るべきである。22日11時、氣比の神々を舟形の神輿に移しまつり、常宮へ海上渡御され、正午本殿にて祭典があり、午後4時に帰還される。梅雨明けの波風穏やかな常宮の浜に氣比之神々が一年一度の海上を渡御されて、景色の良い宮の一日をこよなく楽しみ、且つ神遊び給う御祭で・・・」



仲哀天皇の御霊を乗せ、海を渡る

とあります。どうも七夕さんのような2人だけというロマンチックなものではなさそうであります。

ちなみに氣比神宮の特殊神事説明には「神儀(しんぎ)を舟形の神輿に奉遷し・・・、神功皇后御航行の盛儀を模し・・・」とあり、若干ニュアンスの違う書き方がされています。この書き方からいうと常宮神社の由緒書の方が古いものを伝えている印象があります。氣比神宮の由緒書にある神功皇后の御航行云々というのは神功皇后の「三韓征伐」の故事にならってこじつけたようにも思えますが、どうでしょうか？ 神功皇后の故事に関して常宮神社の由緒書には、安産の神、航海や漁業安全の神としてのみ書かれています。いくさの神という印象は薄いように感じます。

氣比神宮には氣比大神(けひのおおかみ)・笥飯大神、即ち伊奢沙別命(いざさわけのみこと)を筆頭に仲哀天皇、神功皇后、応神天皇、日本武尊、玉姫命、武内宿禰命の七座の神々が祀られています。常宮神社には常宮大神(じょうぐうのおおかみ)・天八百満比咩命(あめのやおよろずひめのみこと)を筆頭に氣比神宮と同様に七座の神々が祀られています。伊奢沙別命と天八百満比咩命以外は全て同



常宮神社拝所(福井県指定有形文化財)

じです。天八百満比咩命は養蚕の守り神とのことですが、その神徳からすると、おおらく渡来系の神ではないでしょうか？ 私は伊奢沙別命と実は夫婦ではないか、少なくとも同族ではないかと密かに考えています。そう考えてみると総参祭に関する常宮神社の由緒書からは笥飯の浜で生活していた人々が同族の常宮の浜に住む人々のところへ大勢で遊びに行った様子が描かれているようでもあります。

ところで、氣比大神は新羅の王子、天日槍であるという説も多くあります。妃は比売許曾神(ひめこそのかみ・赤留比売神)、この神は機織の神とされています。おそらく養蚕とも関係があるはずですが。また、開花天皇の子孫の息長宿禰王(おきながのすくねのみこと)が天日槍の子孫の葛城之高額比売(かつらぎのたかぬかひめ)を娶って生まれた子が息長帯比売命(おきながたらしひめのみこと)、即ち神功皇后であります。

氣比神宮と常宮神社の関係、氣比大神と常宮大神の関係は天日槍と比売許曾神の物語と想像したりするのですが、どうでしょうか？



仲哀天皇の自画像(想像図)



神功皇后の自画像(想像図)

祖先の天日槍が祀られている氣比神宮に子孫の神功皇后が祀られているのも自然な気がします。あるいは、仲哀天皇の後継争いに勝利した神功皇后、応神天皇が祖先に報告するために角鹿へ来たと思像することもできるのではないのでしょうか。

敦賀には白木や杳見には新羅系の神社が沢山あります。このことも氣比神宮、常宮神社の新羅との関係を想像させるものでもあります。

常宮神社には国宝・新羅鐘(しらぎのかね)があります。豊臣秀吉が大谷刑部にその鐘(文禄・慶長の役、朝鮮慶尚南道晋州城のもの)を奉納したと由緒書にあるが、確かな文書があるのでしょうか？

そのような文書がないとすれば、元々新羅の人々が持ってきたものではないか？などと想像してしまいます。



国宝・朝鮮鐘

では、またの機会に。 川上医院 院長 川上 究



ひちゃんが行く

# またまたまたまた

## 奮闘記 第十二弾

### 【埋もれた名所探訪の巻】

今回の「ヨタヨタ歩き」の奮闘記は少し趣向を変えて、敦賀の歴史に残る、メジャーではない埋もれた名所を探訪する。

本日3月21日、まずまずの天候。まず始めに「来迎寺（らいこうじ）」から行こうか。ご存知来迎寺といえは嘉慶元年（1387）創建の時宗の古刹だ。

ご住職に案内され本堂に入ると、何やら慌ただしい。大勢の人たちがそれぞれ懸命に作業を進めている。Ｑちゃん「何かあるのかな？」と問うと、奥さんが「今日は彼岸の中日やから」との声、「あらっほんまか」知らぬは訪れた2人のみ、「こりやまた失礼しました」。

見ると今回何う目的の一つである「木製加飾腰高障子」が普通に使われている。もとは、大谷吉継の居城である敦賀城にあったものを、吉継が関ヶ原の合戦に向かう前に来迎寺に収めたと伝わっている。暫し拝見。外に出るとすぐに山門が目に入る。これも同じく敦賀城にあっ



移築された敦賀城中門



敦賀城から大谷吉継が移設したといわれる「木製加飾腰高障子」

た中門を移築されたといわれている。

来迎寺をあとに、次に向かうは原の西福寺。西福寺も創建は古く、応安元年（1368）、後光厳天皇の勅願により、越前市正覚寺の開山でもある良如上人が創建されたという。この書院庭園は国の名勝に指定されている。現在平成から令和にか

けた大修復が行われていた。歴史上重要であり、魅力のある立派な古刹ではあるが、なぜか参拝客が少ない。「もったいないなあ、もっと宣伝せんとあかん」Ｑちゃん呟く。



西福寺の総門。その奥に見えるのが山門



修復中の西福寺。御影堂、阿弥陀堂、書院等が国の重要文化財

続いて少し車を走らせ、市野々にある柴田氏庭園を目指す。若狭国小浜藩の豪農であった柴田権右衛門が新田開発を始めた頃屋敷を建て、その後回遊式庭園が造られた。小浜藩主酒井氏の休憩所としても利用された記録がある。「甘棠園（かんとうえん）」とも呼ばれ、敦賀富士といわれる野坂岳を借景に、狩野探幽が地割設計し、小堀遠州が作庭したとの一説も残る。この庭園も国の名勝に指定されて、同じく現在保存修復工事が行われている。「今日行くとこ全部



修復中の柴田氏庭園



「中郷古墳群・向出山1号墳」。誰が葬られているのか？

修理中やな」。敦賀もこういった文化財や文化を大事にしているという風潮になれば嬉しい。「さて、次は何処や」。ここで、敦賀の名所として必ず押さえておきたい、敦賀歴史の創生期に当たる古墳を見に行こう。敦賀にはいくつもの古墳があるが、中郷古墳群の向出山1号墳に向かう。中にあるこの古墳は向出山古墳群（3基）と明神山古墳群（5基）からなる古墳群で、特に向出山1号墳は全国でも類例の少ない「鉄地金銅装眉庇付冑（てつちこんどうそうまびさしつきかぶと）」や「頸甲（あかべよろい）」を出土しており、そんなすごいものが出土したことを考えると、古代より大陸との交通の要衝として港が

利用されてきたことの証であり、相当の人物が敦賀の地を治めていたことだろう。ひよっとするとツヌガアラシトかも。そして、亡くなった人を埋葬するのに敦賀全域と港を見渡せるこの高台から見守っていてほしいと願う、この場所を選んだに違いない、と推察する。（あくまでも個人の感想）

ただ、そんなにすごい、歴史的に見ても貴重で、重要な意味を持つこの古墳群が、あまりにもさりげなく、簡単な案内板一つあるだけ。その看板がなければただの小山。その場所についても誰も気がつかない。

敦賀の歴史のルートともいえるべきこの古墳が目の目を見ない、注目を集めないのは何故だろう。こんな地域のアイデンティティをもっと磨かないと、新幹線でも来た観光客にも敦賀をアピールすることはできない。

今日は敦賀の埋もれた名所を探る散歩だったが、改めて敦賀は歴史の宝庫であり、自分たちも知らない歴史が沢山ある。まずは、それを知ることから始めたい。「なんか今日はアカデミックな散歩やったね」と言いつつ家路につくのであった。（河）

【発行】平成31年8月19日（月）  
かわかみ通信Vol.135  
（葉月号）

医療法人 川上医院  
福井県敦賀市松原町1-39  
TEL: 0770-22-0977